

〈目 的〉日常生活において和服の着用機会は減少し、特に若年層の間ではこの傾向が顕著に現れている。しかし、振袖には依然として強い関心が示され、成人式ではかなり多く着用されていることも事実である。そこで成人式を迎えた女子短大生とその母親を対象に、振袖に対する意識を調査し、比較、検討した。また振袖の着用の実態についても調査した。

〈調査方法〉本学女子短大生とその母親を対象に1990年12月から1991年1月にかけて、アンケート調査を行った。調査内容として、振袖に対する意識は、実用性、伝統美、ファッション性等に関する36項目であり、また振袖の着用の実態については、購入状況、購入時期、成人式における着用状況、着付け時間等に関する29項目とした。調査データは、単純集計、平均評定の分析値、因子分析による基本因子の抽出、及び平均因子得点による基本因子の女子短大生と母親間の特徴の分析をした。

〈結 果〉女子短大生及び母親とも、振袖には女らしさや伝統的な美しさを感じているが、値段が高く、動きにくい事も感じていた。母親は規範性を重視する傾向があるが、女子短大生は、規範性にはあまりこだわらず着用機会が多いことを望んでいた。また因子分析（固有値1.0以上、バリマックス回転）により女子短大生は12個の基本的因子、母親は11個の基本的因子が抽出された。これらの因子は女子短大生では、着用性、ファッション性、伝統美等であり、母親では、シンボル性、実用性、伝統美等であった。